

令和7年度 第1回 丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日時 令和7年6月23日（月）
15時00分～17時10分
場所 氷上住民センター 研修室

出席者（敬称略・順不同）

○委員：杉岡秀紀会長、中川フェテレウォルク副会長、八尾由江委員、前田進委員、森田久瑠美委員、藤本理恵委員、大木玲子委員、田路正崇委員、土田咲穂委員、石原和浩委員、古西純委員

※欠席：藤井叙人委員

○丹波市 細見正敏副市長

（事務局）清水ふるさと創造部長、足立総合政策課長、荻野総合政策課副課長兼情報政策係長、垣内総合政策課政策係長、村上総合政策課政策係主査

1 開 会

2 副市長あいさつ

3 委嘱書交付

4 自己紹介

5 会長・副会長選出

6 報告事項

（1）第3期丹波市人口ビジョン・第2期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の概要とこれまでの取組について

（事務局説明）

委員：事務局の説明の補足として、人口減少の問題は、日本全体で言うと想定より前倒しで悪化している。例えば、令和6年の出生数は約68万人で、想定より15年ほど前倒しになっている。丹波市の人口も6万人を切っている状況で、人口を増加させることは厳しいと考えている。明石市は増加しているが、近隣では減少しており、人口の奪い

合いになっている。人口は減っていくものの、いかに市民の幸福度を向上できるか、または地域と移住者が協力するなど、人材確保につなげる取組が重要である。ただし、人口増を諦めるということではなく、社会増に向けて、ふるさと住民制度など実際に丹波市と関わる仕組みが必要である。

委員：青垣地域のネットワークのヒントになる取組はないかと考えている。徳島大学の田口先生にも質問をしたが、女性の転出という点では、同じ論理であった。これまで研究をしているが、先進国でも少子化は進行している。フランスでは、出産数に応じて年金の支給額を増やす取組を実施したり、ベルギーでは相当の財政負担を行い、出産した場合にお金を出す仕組みを構築しているものの、施策的・道徳的に日本ではできないと考えている。取組内容によって呼び込む力に地域格差が生じる。委員が丹波市に來られたような、取組を連続して生み出していきたい。

委員：少子化対策は委員のご指摘のとおりである。行政としては、選択肢を増やすことが限界で、民間とも役割を住み分ける必要がある。当然、面白い地域に人は集まってくるため、そういう地域づくりを行っていくことが重要である。

委員：成果について、若年女性人口の減少率の改善を挙げているが、成果②との関連で外国人の取扱いはどうなっているのか。

事務局：人口分析レポートでは、将来予想における若年女性の人口減少率が減ったことによる推計で、外国人の方の影響は一定あるとは考えている。

委員：若年女性の人口減少率は、民間のシンクタンクが算出した数字で、減少率が 50%以上になる場合、消滅可能性自治体と定義している。今回、丹波市は消滅可能性自治体から脱却しているが、外国人含め、影響はあったと考えている。

委員：高校卒業後の動向について、丹波市では大学がないため、一旦転出すると理解しているが、IターンとUターンの移住は割合どの程度か。

事務局：事務局としては、詳細な数字は承知していない。

委員：転入数は年間 1,400 人程度で、移住相談窓口を通じての移住は、そのうち 140 人ほどである。移住の理由は、転勤や結婚などがあるが、地域での起業や貢献する方の相談が多い。

委員：個人的な感覚として、ほとんど同級生は帰っていきたくない印象であり、丹波市の魅力に気付いていない。そのため、短期と中長期に分けた取組が必要であり、子ども達にも、教えていく必要がある。

委員：委員のご指摘のとおり、出産一時金など、一時的な取組だけでは戻ってこない。転出する 18 歳までが勝負であり、中学校のアントレプレナーシップ教育や高校生との関わりは重要である。

委員：私の同級生もほとんど戻ってきていない印象である。年齢的に就職先で結婚するケースも出ている。一度丹波市から転出し、一人暮らしをすると、実際楽しい。実家というメリットはあるものの、親から色々と尋ねられることがあり、縛られたり、自由度

が低い。一方で、丹波市において、アパートで暮らすとなると、経済的に厳しい。

委員：都会への憧れと地域との暮らしを比較すると、地域の目があり、天秤にかけたときに負けてしまうため、勝てる部分を構築する必要がある。

7 協議事項

(1) 第3期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略策定に向けた取組状況について

(事務局説明)

委員：ターゲットを絞ることで、形として見えるかもしれないと考えている。自分は丹波市に戻ってくるために、一旦転出した。思い返したときに、育ててくれた親や地域の方への思いがあったと考えているが、そういうことには時間を要する。例えば、こどもの時から丹波市での楽しい思い出を細胞に刻むことができれば、自然と帰ってくるかもしれない。今回、女性に焦点を当てることで、シャープになった一方で、女性だけでよいのかとは考えている。同じような年代の男性が必要と考えており、帰ってきてもらうために、丹波市で生きることが幸せであることを伝えていく必要がある。

委員：様々な取組を行政で検討してほしい。実際には、一旦進学のために転出し、都会に就職すると考えている。土日だけでも丹波市に関わってもらえる取組は、ふるさと住民につながる。こういう活動をとおして、帰ってくる人が増えてほしい。

委員：移住者にとって、やりたい仕事ができることが重要である。市からの発信と受信力の双方を向上させる必要がある。特に、丹波市と女子大学生がやりたい仕事にギャップがある。

委員：ワークショップは良い取組であるが、市外の意見も取り入れてはどうか。市外の方だからこそ見える部分もある。また、丹波市の地域性を感じてもらえるようなワークショップになればと考えている。

事務局：市外の方の意見集約について、ワークショップの手法を含め、検討したい。

委員：ワークショップには、ファシリテーターとして、女性委員に参加いただいてはどうか。

事務局：女性委員の方に関わっていただけるか検討したい。

委員：ターゲットとする人物像を抽出するために、アンケートを実施するのか。

事務局長：施策を検討する場合に、より具体的に考えやすくするために、人物像を具体化している。

委員：人物像が受け身の方で本当に帰ってくるのかという疑問がある。個人的にやりたいことがあるなど、主体的な人物像を掲げるべきではないか。丹波市に戻ってきた時に、まちに躍動感が出る。

事務局：ポジティブな要素については、Iターン者に含めていると認識しているが、人物像については、先ほどのようにご意見を頂けるとありがたく、ご指摘の点については

検討したい。

委員：人物像については、1つではなく、UターンとIターンで2つずつなど複数の人物像があつてよいと思う。

委員：ターゲットを絞ることで、課題も出てくるかもしれないが、思い切った考え方は必要である。市の取組が具体的に動きだしており、うれしい思いで、委員会を通して知恵を出していきたい。

委員：人物像は、どうやって抽出したのか。

事務局：資料として分かりにくい点があつたと感じている。事務局としては、アンケートでの意見をワークショップで詰める想定であり、それに見合った人物像として、サイレントマジョリティーを意識した仮定を事務局で行っている。

委員：なぜ武庫川女子大学にアンケートを実施するのか。

委員：包括連携協定の関係があり、アンケートを実施することとなつたと認識している。

委員：武庫川女子大学より近接の関西学院大学などには、アンケートを実施しないのか。

委員：ご指摘のとおり、1つの大学には絞る必要はない。

委員：豊岡市も同様の取組を行っているが、県にも活用できるデータがあるのではないか。

委員：類似データを比較検討すれば、見えてくるものもあるかもしれない。

委員：ワークショップの対象範囲を広げてはどうか。

委員：職場を通じて、参加できる人材はいるか。

委員：個人的には、参加したいと思う。

委員：ワークショップのメンバーを募るにあたり、メリットは必要である。

事務局：ワークショップの参加者に報償を払う予定である。

委員：青垣地域にも中兵庫信用金庫があるが、職員の皆さんにはあまり喜ばれる環境ではないと考えている。

委員：最初の勤務地が青垣支店であり、お店がなく、高齢者が多いという印象であつた。実際に勤務すると、地域とのつながりがあり、温かく、異動時は寂しい思いであつた。丹波市の良いところである。

委員：丹波市だけではなく、近隣都市と連携すれば、可能性が広がると考えている。

委員：行政は単体で完結しがちであり、視野を広げることは重要である。

事務局：3市連携で定期的に意見交換しており、その視点から検討したい。

委員：女性が2%しか帰ってきていないことは衝撃的な数字である。私自身は1999年に帰ってきているが、ある程度同級生が残っている。先ほども指摘があつたが、男性も必要である。人物像の方が求める社会環境は都会に揃っており、丹波市では勝てない。田舎は生活が大変で、今の人物像にはハードルが高いかもしれない。農業に興味のある方などをターゲットにしてはどうか。私自身は仕事をするために、丹波市に帰ってきており、田舎にいながらでも仕事ができる在宅ワークの環境整備が必要である。また、パン屋やカフェなども社会資源であり、重要な仕事である。

委員：普通の仕事では、移住者に響かないことに加え、所得も重要な課題である。そこに勝つためには、働き方や副業がしやすいまちづくりなどの要素が重要である。委員は、パン屋以外に業務を行っていないか。

委員：現在はしていないが、開業前は、農業とデジタルに関する仕事など、4つの仕事を掛け持ちしていた。

委員：ターゲットとする人物像について、移住者の数を増やすためにサイレントマジョリティーへの取組は一定必要であるが、活躍人材との住み分けなど、資料的に整理が必要である。また、Iターンは提供できる住居が枯渇しており、どうUターンに注力するかである。移住テラス内において議論するなかで、活躍の機会があれば、貢献したいという思いの方はおられるが、もう少し年齢が上の方というイメージである。一方で、23～25歳で一旦就職したものの、出身地に帰るという選択肢を検討している方については、35歳までの早い段階で、丹波であれば、早期リタイアできるという可能性など、都会ではできない生き方を提示することも検討している。高校卒業後に働くことは社会通念上、ネガティブなイメージがある一方で、そういう視点もある。その視点を踏まえ、人物像で掲げる26歳という年齢において、どのような選択肢が可能なのか、ワークショップで深堀してほしい。若年女性が、都会での仕事と丹波市での仕事を天秤にかけた時に、本当に丹波市を選択するのか、解像度を上げる必要がある。

事務局：解像度を上げた方が、具体的な施策につながるという指摘はその通りであると認識している。第2期総合戦略では、10-30代の女性と絞ってきたが、漠然としていることは事務局としても理解している。今回、事務局で一旦人物像を検討したが、委員会内のご意見をもって詰めていきたい。

委員：AIを活用し、人物像を設定することも一つの方策である。委員会としては、5点ほど共通意見があったと考えている。1点目に、2%しか女性が帰ってきていないことを踏まえ、若年女性の人物像設定は必要であるものの、目標設定の修正が必要であること。2点目に、若年女性と同様に男性も必要であるが、男性は女性に付いてきてもらうという観点も必要である。そのためには、仕事の視点を磨き上げないと、若年女性は帰ってこないため、副業などの取組が必要であること。3点目に丹波市単体だけではなく、広域の視点で検討することが重要であること。4点目に、帰ってくるために出るという人を増やすため、長期的な取組を行う必要があること。細胞に刻むという発言があったが、その視点は重要である。5点目にワークショップで委員がファシリテーターとして参加することを検討すること。以上を会議のまとめとしたい。

8 次回推進委員会開催日程

第2回丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日 時：令和7年8月頃予定

場 所：未定

9 閉 会